５月総評

西躰　かずよし

今月は、新たな書き手に出会えた。そんなときはうれしい。書くことは刹那的な営みだけれども、書いたという事実はのこると思う。

たいようこうばねるが
さつきばれを
たべつくしてしまいました。

うたた　　岡山県

たべつくされたあとの空には何がのこるのだろう。ながい空のものがたりの一節のようにも感じられる。『たいようこうばねる』も『さつきばれ』もそれぞれに息づいていて、いのちの輝きが感じられる。同じ作者の作品に『風が強くて工事現場がひかりだす』、『指一本ぐらいで潰れちゃうぐらい／今日の私はさくらんぼです』といったものがあるが、いずれも魅力的な作品である。

日向夏をわすれる
息をわすれる

村上　すう　　京都府

語り手にとっての日向夏は、息をわすれてしまうほどに、かけがえのないものであったに違いない。

ぽーんぷゆ
めってめけいてめけもれば
うたは
あなたによまれているよ

Flim　　神奈川県

うたの届く理由なんてなくて、それでも届くと思うのは、ことばじたいが理由を必要としないところから生まれてくるからだろう。『めってめけいてめけもれば』するから、うたは届くのである。

キャベツ畑の
トラックから
５月のサザンが
きこえた。

にゃー　　群馬県

たとえば、これはレコードジャケットのイラストみたいで、広大なキャベツ畑に置かれた、みずいろのトラックのラジオから、５月のサザンの曲が流れてきます。

金曜の進学塾で諦めを
説かれる間
月が優しい

マズルカ　　山口県

常にあきらめは、やさしくて残酷だけれども、その時のやさしさが月だったから、一瞬だけそれに身をゆだねられたのだろう。あきらめきれなかったという事実が、月を登場人物のからわらに呼びよせたに違いない。

つま先で揺られる電車
街の底、
化石みたいにひかっています

こはくいろ　　大阪府

教室は光る抜け殻
順番にあたたかくなる

こはくいろ　　大阪府

銀色のことばが降る街
わたしより
さみしいひとに憧れていた

こはくいろ　　大阪府

語り手のことばによって世界が構築される。街の底が化石みたいにひかったり、教室が抜け殻になったりと、そこから豊かな世界がひろがる。等身大のことばが、はっきりとした輪郭をもって読者に迫るのは、それがかつてのなつかしい場所をもう一度思い起こさせてくれるからなのだろう。

四合も炊いて全てをおにぎりに
していいですか春は寂しい

いまはじまるの　　兵庫県

「四合も炊いて」とあるので、複数の人への炊飯というより、自分の分に炊くお米の分量についての問いだと思う。そしてそれが本当なら四合というのは少し危うい。たとえば全部おにぎりにするのだから多くても二合で十分だろう。でも四合ともなると成人男性の一日の食べる量を超えてしまう。食べきれないほどの米をすべておにぎりにしてしまおうとするところは、どこか破滅的ですらある。だからだろうか。『春は寂しい』というありふれた一節がとてもリアルに感じられる。

こどもの日柱のキズは離婚前

田崎森太　　東京都

子どもの日に、離婚前の、子どもの背の高さを刻んだ柱を見たのだろう。何気ない視線の描写が、複雑な感情をうつしだす。

挨拶は新車の匂い梅雨の月

杢いう子　　佐賀県

新車はいい匂いとも、わるい匂いともわからない香りがする。挨拶もまたそうゆうものなのかもしれない。作品がアンニュイな印象をまとっているようにみえるのは気のせいだろうか。

パキラ、独身、海
光合成中の窓辺だと思う

中矢　温　　東京都

作品から、どことなくものさびしい感じを受けるのは、ぽつぽつと並ぶ単語の効果かもしれない。一人暮らしの自由と、孤独が、スマートなことばの配置によって表現される。

ここは森オートロックのはやい森

松下　誠一　　東京都

とてもキャッチーな作品。ただ『オートロックのはやい森』という表現は、モダンでありつつも、どこかへと駆り立てられるような不安を内包しているかのようである。その森には本当はだれも住んでいないような気がしてくるのである。